猿新聞

編集・発行者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

獣害の背景にあるもの

その2

名張市周辺の自然環境が、大きく変貌する要因となったのは、昭和38年に着工した大手私鉄による大規模な宅地造成でした。

名張市の都市計画により、市東部の林野に総面積380万㎡もの広大な団地を造成し、その後もつつじが丘、百合ヶ丘など、多くの団地が造成され、環境も人々の暮らしぶりも大きく様変わりしています。そして野生動物をとりまく状況は、以前にもまして厳しさを増しており、その被害は市内全域に広がっています。

山間地域の過疎化が進む中、野生動物は分布を拡大し、市街地にまで出没して被害を出しています。

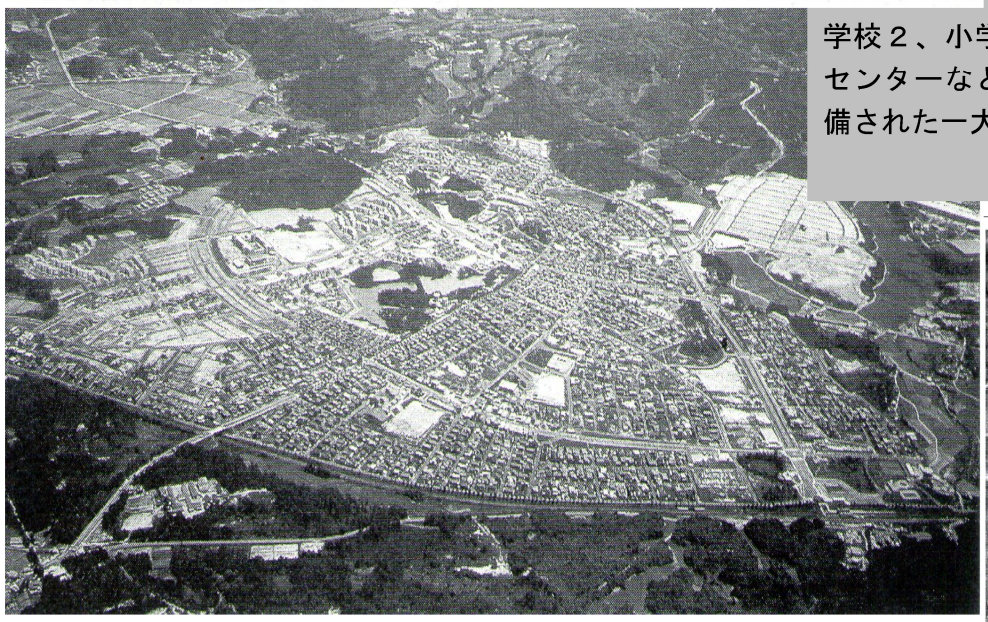
大規模な宅地造成により、自然が持つ多面的な機能や多様な生物がもたらすさまざまな恵みを将来にわたり奪ってしまいました。

自然植生も大きく影響を受け、希少な生物や生物多様性が急速に減退しています。さらに、多様な自然環境が失われ、野生鳥獣の生息域が全国的に拡大し農林被害が深刻化しています。

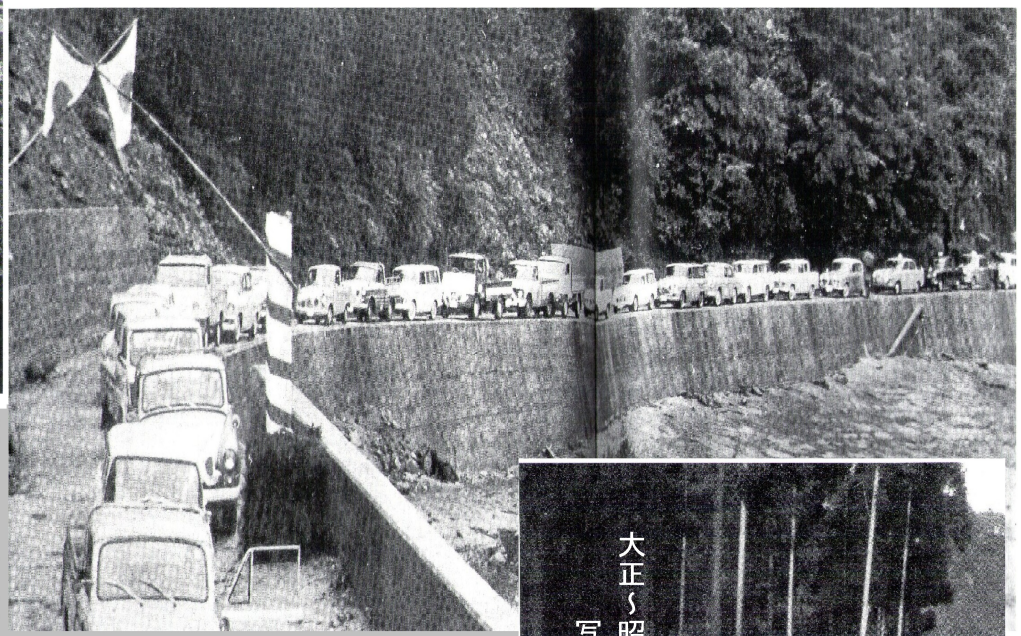
そこで、今問われているのが狩猟人口の減少問題です。狩猟人口の減少は、被害が増加の一途をたどっているなか、大きな痛手です。

鳥獣捕獲の中心的役割を果たしてきた狩猟者の減少や高齢化が著しく、狩猟が環境保護に果たしてきた役割の大きさをいま見直されています。狩猟により生態系のバランスを取り戻すことです。

桔梗が丘団地建設予定地。
昭和38年頃は、自然豊かな広大な丘陵地であった。　写真＝伊賀・名張の里より



昭和52年頃。拡大途中の桔梗が丘団地。高校１、中学校２、小学校３、銀行やショッピングセンターなど、多くの生活インフラも整備された一大ニュータウンが出現した。
写真＝伊賀・名張の里より



曽爾街道復旧パレード。
伊勢湾台風の被害復旧と併せて曽爾街道の改修が行われたのが昭和34年頃。曽爾街道周辺には「名張中のサル」が、生息していたといっても過言ではないほどサルがいた。
改修工事の騒音などでサルは減少。
道路が良くなるにつれ、観光客が激増し曽爾付近の環境がサルにとって相容れがたいものになっていった。
写真＝伊賀・名張の里より

大正～昭和初期の曽爾道
写真＝伊賀・名張の里より

また、狩猟を通じて野生動物と、どう共存していくかも大きな課題です。

狩猟免許の所持者は、現行制度が導入された昭和54年度では全国で約44万7000人だったが、平成24年度には約18万人と半分以下に激減。加えて、猟師が高齢化する中で、生息数が爆発的に増加しています。

駆除して片付くほど、簡単な問題ではありませんが、狩猟を通じて狩猟文化を見つめ直し、野生動物との共存を図り、駆除個体を地域の資源としていかに活用するかが、今後の大きな課題です。

欧州では貴族の伝統料理として古い歴史がある食文化ですが、日本でも5年ほど前からジビエブームが山間部を中心に全国で広がり注目を集めています。

また、近年生物多様性に深刻な影響を及ぼす外来生物の生態系への悪影響などなど、深刻な社会問題が次々と提起されています。

人のいろいろな営みに伴う自然環境の変化によって、いま、絶滅に直面している野生動植物種が増えています。このような野生生物がもたらす様々な問題を、人間社会がどのように合意形成し折り合いを取り付けていくのかが問われている時代です。

無秩序な都市化、工業化が自然環境を破壊し、人間自身の生存を脅かすまでに至ってきたことは否めない事実です。だが、私たちは、未だに自然環境の破壊から抜け切れません。

環境保全のためは、住宅地・耕作地・森林地の等面積配分が望ましいといわれていますが、この理論は、既に全国的に適合しがたい現状になっています。

今後は、次世代のために自然保護の強化を図り、野生鳥獣と共存が可能な自然環境の再生に取り組まなければなりません。野生鳥獣の住みよい自然は、人間にとっても住みよい環境です。

昔は各集落で、こんな風景がよく見られました。

人類史上、狩猟はきわめて重要な役割を果たしてきた。だが、現在では猟師が高齢化し減少する中で、野生動物の生息数が爆発的に増加。改めて野生動物の管理のあり方が問われている。
写真＝伊賀・名張の里より

名張B群と伊賀竜口

B群は伊賀竜口周辺を離れず行動範囲は非常に狭くなっています。

集落にサルの目線から見た餌や、弱点があるからだと思います。

先日、連絡会会長、田村と集落環境診断をかねて地元取材を行いました。

地元民によると頭数は少なく10頭前後。ねぐらを伊賀竜口の山と決めていて夕方になると帰ってくるそうです。

B群は、昨年の大量捕獲の影響で「群れ分かれ」と同じ状態かもしれません。

群れが2つに割れた場合、新しくできた群れは山には帰らず、必ず集落に近い場所に縄張りを確保するといわれています。

山で自然のものを食べているサルと、人里で作物などを食べるサルでは全然生態が違い、初産年齢は低く、出産頻度は高く毎年産めるようになります。

また、死亡率も極端に低く10%から20%しか死ななくなります。

山のサルの、平均増加率は年1%。でも、人里近くの群れでは毎年10%以上の増加率になります。100頭の群れなら翌年10頭以上も増える群れに変わってしまいます。

苦労して大量捕獲を行ったが、元の頭数に戻るのは時間の問題。

隣接する大和龍口では、サルやシカ・イノシシの多目的防護柵を全域に設置していているので大和龍口周辺にはサルは寄りつかないと住民。県境に隣接する地域では、格差のない広域的な対策が求められます。

片方にしわ寄せがくるようなことでは良い対策とはいえません。

撥(は)ね付け合いです。

写真＝伊賀竜口の現状を説明してくれた「ギャラリー和」のオーナー高田さん。

シカについて

日本鹿の総数は、こ２０年で１０倍弱にも急増したといわれていますが、その要因はさておき、農作物や木の樹皮が食い荒らされたりする被害が日本各地で毎年、深刻化しています。

シカ肉を食べて増加を食い止めようとする運動も、各地で盛んですが、うまくいっておらず、また農作物を保護する防御ネットも、一時しのぎの感じがします。

ここで、シカの生態についてチョット触れてみます。

シカは元来昼行性ですが、人間の活動が多い場所を利用するシカは、夜間の活動量が多く、逆に人間の活動が少ない場所を利用しているシカは、昼間の活動量が多くなる傾向。

季節毎の動きは、冬季（12～2月）は活動量が減少し、秋季（9～11月）は活動量が増える。冬はあまり動かないでエネルギー消費を抑えているようです。

発情期には強いオスがハーレムを作りますが、それ以外の時期はオス・メス分かれて群れを作ります。

シカの口の届く範囲の下草や葉のうち、好きなものから食べていき、1日3～5kgも食べます。

最近の調査から、被害は、特定のシカたちが起こしていることがわかりました。

これらを「加害ジカ」と呼んでいます。加害ジカは被害地に近い場所で生活していることがわかっています。捕獲・駆除には、加害ジカを特定し被害の根源を断つことが不可欠です。そのためには、地域でシカの被害や出没状況の情報を共有することがだいじです。

防除には、金網柵などの物理的防除柵と、電気柵のような心理的防除柵がありますが、それぞれの長所短所を理解して、設置するよう心がけましょう。

次に個体管理ですがさらに、次なる加害ジカを作らないように、シカの数を管理する必要がありますが、増える要因となるメスジカの個体数のコントロールが最もだいじなことです。さらに増える数以上に捕獲することが重要です。

チョット一服

鹿の角

近年、多くの鹿が駆除されているが角や皮はどのように利用してるのか？。一頭の鹿も、肉を食べるだけじゃなくその他も部分も無駄にせず、その命と共に大切に扱うことが大切です。鹿は姿の美しさや立派な角のイメージから、高貴な人、権力のある人の象徴でもあり、角が1年ごとに生え変わることから、稲作で1年サイクルの営みを続けてきた日本人にとって、鹿の角は昔から力の象徴として、また福を呼ぶ縁起物として人々から拝(あが)められてきました。

昔から猟師さんらの間で需要があったようです。飾りだったり、加工品だったり、刀掛けやまた牛の鼻輪をつける際の穴あけにも鹿角が活用されるなど、生活の中で活用されてきたといいます。

とは言え、現在の鹿の年間駆除数は40万頭前後。一般の狩猟も加えれば、その倍近い数が年間ハンティングされている事になります。皮革は一頭一枚ですが、角は×２になり膨大な数になります。

そのほとんどが需要がなく廃棄物？。

もったいない話！！。

鹿の角には秋の繁殖期に完全に成長しきって骨化した白角と春先から生えてくる途中段階の新しい袋角があり、袋角は使えませんが鹿の角や骨は、木材より固く加工がしやすい素材で質感がとても良く、幅広いデザインの可能性を生み出してくれます。皮革は甲州印伝が有名です。

何はともあれ、頂いた命です。肉はもとより、内蔵・皮革・角、全てを利用するよう心がけましょう。

指導員報告

サルの出没状況

名張A・B群

4月の動向

A群は、4月の初旬までは下比奈知から比奈知ダムと長瀬方面で活動しています。花や雑林の新芽と竹林内に落ちている木の実を盛んに採食している現場を目視しています。

B群は、4月初旬は、竜口方面で活動していましたが、中旬からは長坂方面で電波受信がありましたが、下旬は西谷方面で活動しています。

指導員交代

片桐さん

平成29年4月1日をもって指導員が交代しています。

サルやイノシシ、シカなど野生鳥獣の増加で農作物被害が深刻化するなか、指導員の果たす任務は大きなものがあり、地域関係者は大きな期待を寄せています。

前年度榊原さんに変わり片桐(かたぎり)　俊一(しゅんいち)さんが本年度指導員に就任されています。

片桐さんは、前名張市役所職員で、定年後の再就職だそうです。

土地不案内なところもあろうかと思います。

皆様方のご協力宜しくお願い致します。

お知らせ

名張鳥獣害問題連絡会では、研修会を開催します。

『みんなで守る！集落で取り組む獣害対策に向けて』

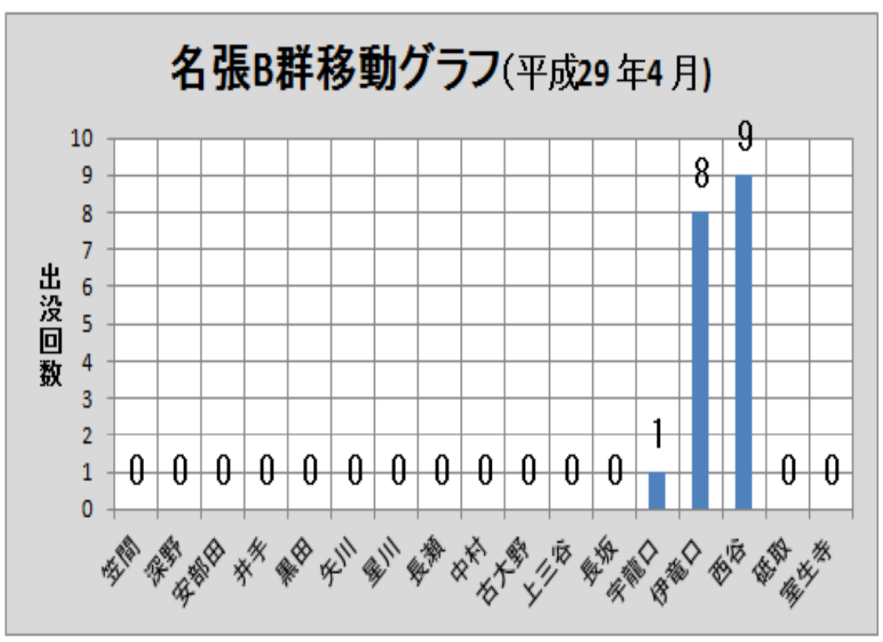
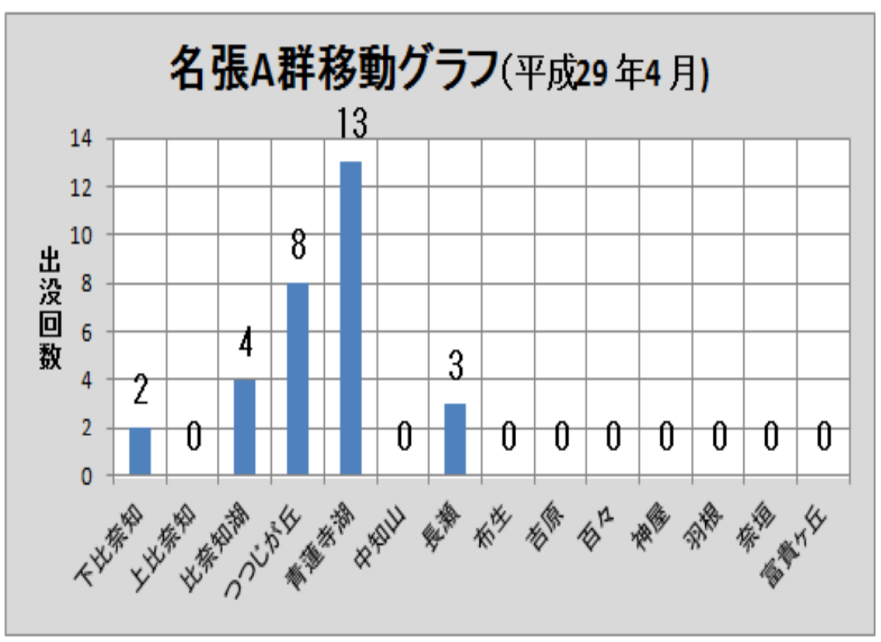
日時・6月4日（日）午後1時～3時

場所・国津ノ杜（くにつふるさと館）

内容・獣害対策に関する研修会

今回は国津地区の事例報告をふまえて具体的な対策について懇談します。

多数のご出席をお待ちしています。

名張鳥獣害問題連絡会発行部数

錦生地区：100部
赤目地区：200部
箕輪地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部
市民センター：120部（12地区）
名張市議会：20部
名張市役所：20部